

随 想

猫の親子 蠅の親子

笹川 通博

今度越して来た所は、海に近いせいか、猫がたくさん住んでいる。一見かわいいのだが、どうも目つきがよくない。飼っている訳ではないので当然かもしれないが、人を怪しむような、小馬鹿にしたような、さもうさん臭いとでもいうような目つきでじっと見てから、急に体を回転させて駆去って行く。こちらが親愛の印に手を差し伸べても警戒するばかりだ。鍵をガチャつかせたり、小石を転がしてやると多少興味を示すが、目が合うと途端に逃げて行く。かと思うと、坂道の真ん中で気持ちよさそうに日なたぼっこをしていて、車が来ても、クラクションを鳴らされても、動こうともしないことがある。

短く途中で千切れたようなしっぽの猫が多い。はじめは交通事故か何かで千切れたのだろう、かわいそうに、と思っていたが、これはこれで品種の一つだそうだ。片目が普通の金色で、もう一方が青い目の猫もいる。本当にものが見えるのだろうか、と心配に思う。もちろん、普通の三毛や寅、黒や白もいる。そんな猫達があたりの坂道や家の周り、柏や松の林を、何をしたいのかうろついている。海に臨む山の小道を猫が登って行くのを見ると、この上に昔話のような秘密の会合場所でもあるのだろうか、と思ったりもする。去年だったか、子供達がやせ猫におもしろがって餌をたくさんやっていた。しばらくするとぶくぶくに太って、学校の便所で下痢をした。冬、子供達にストーブの上に載せられて大火傷をしたこともある。その猫も面倒をみていた子供達が卒業すると、来なくなった。

初夏、近所の猫にも子供ができ、親子で遊んでいる姿を見かけるようになった。母親は例の金目青目で、いくつもあるお乳がパンパンに膨らみ、寝ころがって子猫達に乳をやっている。ところが、家に帰るとどうも玄関前が臭いだ。明るい時によく見ると、そこかしこに汚いものが落ちている。蠅が飛び回り、交尾までしている。甲虫や足のたくさんある奴、足のない奴が集まっている。家の陰から猫の親子が、呆然と立ち尽くしている私の姿をそっとのぞいている。おどす真似をすると逃げて行った。昼間いないのをいいことに、連中はよりによって私の家の前を便所に決めたらしいのだ。生れて間もない子猫は、まだ土に埋めることを知らないのだろう。街を歩いていてもあちこちで臭いがして、困っているのは私だけではないようだ。寄り付かないように、害虫退治を兼ねて殺虫剤でもまいてやろうかとも思った。しかし、そんなことをすればあの子猫達もただでは済むまい。もう少し大きくなればなくなるだろ

うと思いながら、掃除をしていた。やがて、思った通りなくなった。

今度越して来た家は古くて、本当に傾いている。この辺のこうした家は、昔、鉱山が盛んだった頃の従業員住宅だ。お便所は、地球の重力を利用したものだ。はじめは大変きついお花の臭いがした。但しカリガネソウというお花に似ているのだが。おまけに用をたすと律義にもお釣をくれるので、汲み取ってもらった。それからはお花の臭いもお釣も大分少なくなった。ところが、夏になると大変な数の蠅がわくのだ。蠅取り紙を買ってぶら下げておくと、一週間も経たない内に両面黒くなる。毎晩、スプレーの殺虫剤をかけ、十匹位を掃除機で吸い取っている始末だ。網戸はあるのでどこから来るかと考えれば、穴の中からしかない。これだけ退治しても出て来るのだから、親子で住んでいるに違いない。餌は、毎日私が新鮮なものを差し上げている、という訳だ。ウジ殺しをまいたら少しはよかったが、やがて元に戻った。蠅の親子はどうしても好きになれない。

ある夜、家に帰って玄関に入ると、足もとで何か光が点滅している。おや、こんな所に豆電球が、などと思ってよく見ると、どうやら蛍なのだ。あわてて外に出てみると、側溝に蛍がほんの数匹、紫陽花の陰で淡い草色の光を点滅させている。恥ずかしながら私は蛍をほとんど見たことがない。この前、湖のほとりの神社に薪能を見に行った帰り、用水路で蛍がたくさん光っているのを見て感動した。私は、蠅の親子を退治するためにしたことや、猫の親子の不始末に對してしようとしたこと、少しでも快適な生活を送るために普段何気なくしていることを、思い返してみた。また、朱鷺が姿を消したのは、餌となる小さな生き物がいなくなったからだということ。大分気持ち悪いが、汚物は何と多くの生き物たちの生活を支えていることだろう。そこに集まる生き物は、自然の循環の輪を結ぶようだ。そうは考えるが、一方で、清潔で衛生的な生活を送りたい、バイ菌や寄生虫にとりつかれて病気にはなりたくない、とも強く望むのである。

